



TITLE:

<報告>佐藤篤彦君の助手任用にあ
たって

AUTHOR(S):

辻, 周介

CITATION:

辻, 周介. <報告>佐藤篤彦君の助手任用にあたって. 京都大学結核胸部疾
患研究所紀要 1972, 6(1): 91-91

ISSUE DATE:

1972-12-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/52299>

RIGHT:

鈴木康弘助手新任に当っての紹介

安 平 公 夫

昭和39年3月、京都大学医学部を卒業。1ヶ年医学実地修練の後、40年4月、京都大学大学院医学研究科に入学。岡本耕造教授のもとに主課目病理学を研究。所定の単位を修得した後44年3月退学。44年5月より京都府立洛東病院に勤務する側ら、本研究所病理部において研究に従事。45年7月、洛東病院を辞して本研究所医員となり、臨床検査業務を担当。46年9月、カナダに渡り、トロント大学医学部産婦人科教室で研究に従事。病理部助手任命が内定すると同時に帰国。本年9月1日助手に任命。

大学院在籍当時の研究は、高血圧ラット研究グループにあって、その内分泌関係の仕事を担当。岡本教授其他と共に4篇の見事な論文をJap. Circ. J (1966—1967) に発表し、更に数篇の論文を内外誌に掲載した。大学院退学当時、燎え盛っていた学園紛争の最中、若い改革の意

気は時に則を越える行動に若者を走らせるかに思われた一時期、彼は積極的にこの運動に参加して声援を送る反面、研究者であることの自覚を一刻も失うことなく、早朝より夜半に及んであくことなく研究に励む彼の姿が研究室でみられたことは、同僚研究者としての私共に、当時大きな慰めと励しとを与えたものであった。この情況熾烈な間に行った研究の一部が、最近彼の単独論文として *Endocrinology* (1972) に掲載された。立派なものである。現在基礎系3部門の助手選考は、予め基礎系全教官によって行われ、次で教授会の証認を得る習いであるが、選考に当って全員一致鈴木君を推した事実は、研究者としての彼の将来に期待することの大きさを物語っていると言ってよいであろう。

1972. 9. 28

佐藤篤彦君の助手任用にあたって

辻 周 介

佐藤君は、昭和10年2月2日の生れ。この年は私が京大医学部を卒業した年で、今更自分の年齢が思出される。本籍は札幌市とのことだが、多分ここには物心ついてからは住んでいなかったのだろう。彼から北海道の話を聞いたことがない。

昭和28年に大阪の阿倍野高校を卒業している。この間に、野球の補手として甲子園にも出場したという噂がある。今でも野球は研究所で

一番上手と自慢している。昭和43年に岐阜大学医学部を卒業し、京都大学大学院医学研究科に入学と同時に研究所の内科第二に入局し大学院修了後もそのまま現在に至っている。

スポーツマンらしい朗らかな性質で、臨床の勉強がしんから好きらしく、それだけに熱心であり手間を厭わない。日進月歩の呼吸器病学の先端に立って、斯界の牽引力となることを期待したい。